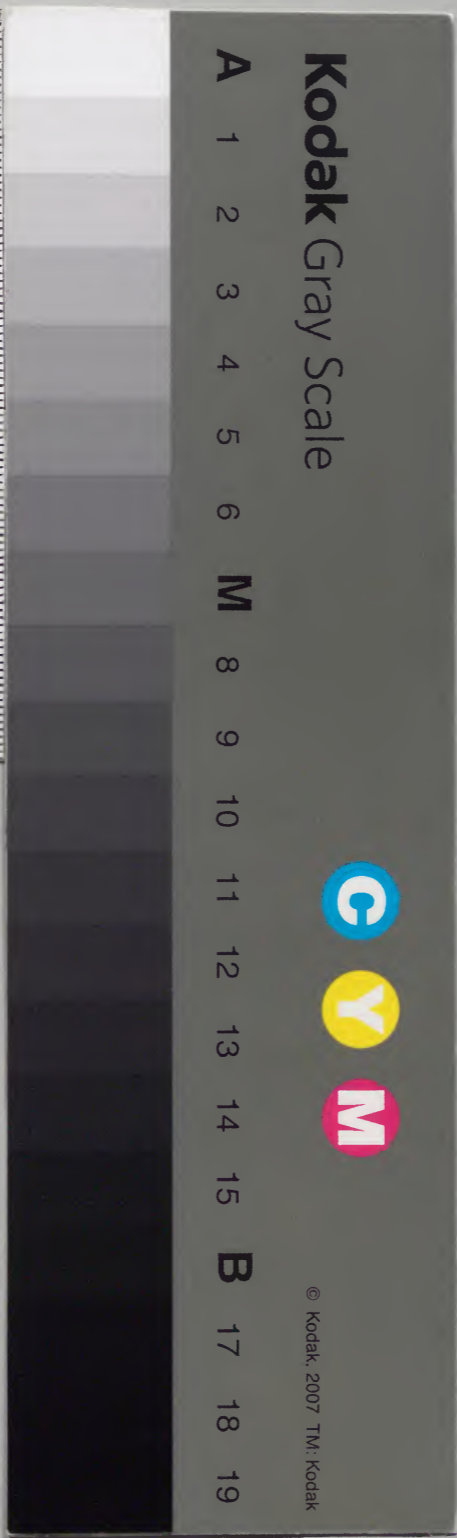


內務省圖書
 第一一四〇五號
 和書部地理類
 函
 共二十冊

和書門
 二九三七一
 一三二
 一四一
 二冊架函號類

63
 內閣文庫
 和書
 三九三七
 一三二
 一四一
 二冊架函號類

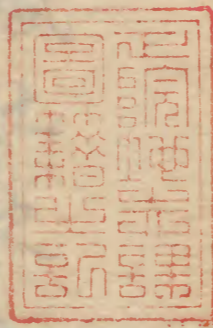
內閣文庫	
番號	和 29371
冊數	12 (1)
函號	176 63



地理考 卷之一 二
神社考 三
佛寺考 四五

歲時考 六
土產考 七八
人事考 九十

雜著 十二



古之為地志者。蓋詳其山川風
氣。王地之所出。民俗之好惡。以
及名官賢士之偉績美行。與世
代之變遷。事物之沿革。將以供
經世之用。是故為政者有取焉。

惟吾
大東在昔
先王詔撰奏六十六列風土記
與國史律令格式藏諸天祿石
渠之府以為經世之大典後遭
板蕩之運古籍散亂僅僅存於

兵燹之餘而數百年年風土之記
無有繼而修之者則遺文逸事
湮滅不傳於世也。誓古者憾焉
今代聖明文運方興修舉舊典
不無其人然而山越城國志一二
編之外寥寥乎希聞者豈不以

世代久遠。文獻不足。徵故耶。淡
寓子家於博津。好古而博。隱干
鑿嘗蒐韓^輯鄉里遺事。錄為十二
卷。名曰石城志。蓋依舊名也。頃
上邨氏為之請序於余。繙閱其
書。則上下千有餘年。地理人事。

之變遷。神祠佛宇之興廢。及他
名區陳跡。故事遺文。巧藝珍器。
物產之品彙。民俗之歌謠。凡關
係博津者。無不徧舉而備載焉。
而鄉人有一善之可稱。必謹錄
之以勸將來。其旨微矣。嗚呼。是

書也。其於誓古何不足微耶亦
可以補地志之闕而蒞事者或
有取焉。且聞淡寓子之著此書
也。息元貫有勞焉。余既重上邱
氏之請而私嘉淡寓父子之好
古而纂述克成其功。於是乎題

數言於卷端云爾

皆

明和丙戌臘月一日

草江散人安惟允題

凡例

一 博覧の世より唐宋元明をわたりて海あり

船の入津せしありて且遣唐使及び僧徒海高

の輩も世にあり洋と名づけ彼に航する如きは

海に船業の濫ありてはるるに世に海あり

地志を籍もかりけり古に事ありて近代の事録

と記すは是れ海ありてはるるに世に海あり

出れ海ありてはるるに世に海あり

海ありてはるるに世に海あり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '海言' and '唐'.

物と云ふ此書最丁寧及度可も一邑一縣の
瑣細な事なれど措く記され今此編の元と
殊な撰難と云ふ一人の情は尋常な事な
るふはひの輯録ぬとて西智免園の母子は
漢人の之つとて物ありは高麗賈思の事な
るはははかるともなるのありと云ふは
海のこ

一 予はめく世言を採するは志あるも一は情あり
多て見せしむるも多く遺忘を門地地とて思

國漢書庸愚の才なきはかたわらばかた世人の
嘲と記するも多し海は一日系回安佐抄多の書
街正也
予にやうして世情ありは一は情の地ありは事
古跡も地邦もまこととて一は情の地ありは事
外徴とて一は情の地ありは事
情は善ふ古記を文の僅に存せりも終に不致
るは後とて識る事ありは一は情の地ありは事
この書一は情の地ありは事
輯録一は情の地ありは事

ふつはう〜と云ふ計も〜とありしは昔て曰
昔子と云ふ甚〜と云ふもわの管見赤發測との
為中當に多他人の誤り〜と云ふと釋し
ゆき〜もあね〜に後〜止〜け〜い〜め〜
〜て孟浪杜撰の笑談〜り〜い〜と云ふと云ふぬ

一此編の門下乃書我の鑑別〜著述世の九別軍

記 此は福法は信正の佳士あり昔何彼と云ふ而の云候夫〜
に全〜と云ふ〜張宗文等手中常史立原と云ふ再い〜と撰り 鑑別

鐘風土記貝原黒田家譜口上徳の良民傳竹田壬子

荒政記田原早稲赤江海風帆草古田昌赤等

黒田家譜赤浪速政代記赤西渡指南赤見守

日記赤常陽二月記赤博多記赤博多記赤

拾遺赤等也は亦神社佛堂の縁記赤は公法家

野々原乃古記赤等事一系譜赤不赤平赤不赤追赤ら赤の

解和洋の門書赤も赤〜と云ふは所〜と云ふけ

一寺社の傳説多〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ

〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ

〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ

とても志をく正偽と辨しむるべし

一 竹多の元宛拾遺集小伝文部理めして章とけり

ふまはるるに義理をきく通曉しむるにあらざらん

ゆはは編み下巻の巻くを文を改め置き

一 予素より世務に汲くうて東西を奔走し信

筆使めたるしむの餘力に依りて終もあはれ

古書古記と探素して元費めあへ且つ

しりんをうまはせりすのありまは口授と

なして編録しむに又事此毎にうて

その右老の筆に寄り同家詞謀誤を正し

改く老の筆に寄り編とあせり

七のめふらと披読め使ありし

旅の如く掃へてふるに生

え費をすくわはる不

ぬといふる易簡と専ら

る事とかなるに

やとらるるに

りう

年

年

年

年

年

書

明和二年酉春二月

石城府

淡富散人謹書

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

博多古圖并新図

按此慈和殿古図拾遺小増ぬ圖中別不ありしや
ふらうふ福海山の多うもてしは博多此境同あり
唐浦といふ今福島の六所通てありふは見ありし
とらうや多く其別をとりてはねれはゆきともいふ
ふらう事成りしとあうふは飯倉唐浦と稱するは庄
浦りといふ唐庄の字取おれしははる有る唐若丸
のちや浦りかへん

第 二

茶 之 妙 處 甚 多

一 曰 清 心 火 之 功 也 凡 心 火 熾 盛 則 神 志 昏 迷 而 氣 血 不 平 矣 飲 茶 則 心 火 自 平 神 志 自 清 矣

二 曰 助 胃 氣 之 功 也 凡 胃 氣 不 足 則 食 不 化 而 腹 中 脹 滿 矣 飲 茶 則 胃 氣 自 足 食 自 化 矣

三 曰 消 積 滯 之 功 也 凡 積 滯 不 化 則 腹 中 結 塊 而 氣 血 不 通 矣 飲 茶 則 積 滯 自 化 氣 血 自 通 矣

四 曰 除 痰 飲 之 功 也 凡 痰 飲 不 化 則 胸 膈 不 舒 而 氣 血 不 平 矣 飲 茶 則 痰 飲 自 化 胸 膈 自 舒 矣

五 曰 止 渴 飲 之 功 也 凡 渴 飲 不 止 則 氣 血 不 平 而 神 志 昏 迷 矣 飲 茶 則 渴 飲 自 止 氣 血 自 平 矣

蘇 州 知 府 王 公 題

東海道

津田九郎

男 元曾

地

...

...

...

...

...

...

石城志卷之一

津田元顧校定

男 元貫編録

地理上

謹く考ふに人王四十二代 元明天皇和銅六年

夏六月洛州に詔して其國の風土記を撰ばしむる

由後世に傳へし其記を撰ばしむる或は或は

去くにあらずのゆゑ我が國の風土記の事をも

今存する所は少く其後二冊の風土記の事をも又全か

王や抑々ゆえ縁の通はひの國君 徳政の傳はるる原
久き傳寫信 形益として 後記傳風云記一節ナハと云

後記傳風云記 撰者未詳とあるはひしより 再の洋書著者明
ニテト云々

かゝる事と云はるる 故に本邦の聖事と云ふこと 其の事ニ

きめ河原抄の事曰日本後記曰 隆徳天皇弘仁

五年丙午十月庚午太宰府言新羅人率彼古智亦

二十六人漂著筑前國博多河原其由未詳遠投風化を

博多に在の國史かゝる事 始りては河原抄の事云々

ありて其の始りての事云々 今も博多に在

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代
本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

本傳記の若くはやくと云府より述りては 四代

室龜十一年此初め日流電を幸府僻居西海
諸苗朝貢舟楫相定由是簡練士馬精洗早
兵以系威武以備非常と云う古来の云傳へし
天智天皇を大子ありて而も小なりありし時博多ありて行
落ありしは博多の例ありしと博多の富家の家傳に
若而しと事ありし今もあやむるはと云うと云ふ其
製りて麻と糸のこころとて奥も一返るる文ありし
御東に轅のほつたはと云ひしと云うと云うと云う
群衆等と云う博多は中安社の事と云う

其考りて文あり其文あり

敬云固形解

申請中之事

言上 新来唐船賣隻子細状

石井唐船今日同時筑前國那珂郡

博多清志賀嶋前海到來者任先

例子細言上以解

長治二年八月二十日 鑑口田吉任

本司兼監代百濟唯助

長治の天皇七十六代 堀河院の字号也石の記す

今と他國の高麗室の事りて三方の地廣平に
乃漢の道より物申南の平東北地よりつた
此の道は昔より後世通して往來繁し西は海
川ありて東は石室川ありて中より編戶の民
形は並し出入つと運送郵の便多し貨物多く
民の日用の衣食貨物之より以て世古寺石刹又
多く海を四方轉轉の地なりて天府の邑と習
ひては所南北の中程に往來東南より通して
入海より神慶よりより是唐社の入し漢より

此海より少波澳の漢と今入海なりて其意
のこわい不強しと様を同はるなり海東南に
通して今是と云ふなりと号なり昔の澳の漢の
名は海西より石室長く連つて東に氣多なる
ありて西に今はありて是より古よりいふは海
小室城の漢の爲なり石室城築してありて
と文永の漢の頃蒙古の城を築き居りてりか
と攻
まゝし防ぎの備の爲なり石室城の漢より
上文後人王八十九代 龜山院文永六年戊辰閏五月十

やねりしとわ又いふ家の大田家無き其時神の優
の海にちい田と守渡領とありて大田氏と云ひ
仲の侯と大田氏の領ありしと云ふ海東流石に六代
もむね氏多傳戶山武成とありて山武成西の
いふ傳戶大田と云ふは六代傳戶とありて海東流石に
物部入の事作りて成化七年にむねりしと云ふ物部の又明
と云ふ事ありぬ其時の所伝ありしと云ふや其後を
氏と大田氏と云ふと云ふと今我々の時文に據る
いふ大田氏の二年大田氏と云ふと龍造と云ふと相成りしと云ふ

うはわりの小孫りし氏屋と云ふ又云大田氏と云ふと
ありぬ今ある大田氏の傳戶のまに花 の類と云ふ何と云ふは中世あり 佐別里にまに花
と云ふありし者いふ事ありと結ひしと云ふ義孝と云ふ事ありし
天正十六年のまに花伝書に云ふ大田氏と云ふ人の結と云ふ
を政んて九代目下向るふと云ふ傳戶に傳ふありし
ういゆと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
二十餘日遊るありしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
南東流石と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
所と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

- 一 地子法没所免許し事
- 一 日下津浦の事
- 一 遠近の事
- 一 宣海口の事
- 一 津口の事
- 一 出火の事
- 一 徳政の事
- 一 許清の事
- 一 押買振替停止の事

石の條より遠く、
 還科の事

天正十五年六月日

控

今度大明國御勅命に奉り、海内各郡其の
 軍隊陣取に上り、地下人の百姓等、
 今迄教令の事、
 丁仕り給はる事

一 石原に於て遊遊中旅名捕捕うとて之が御津津守
一 遊遊に見張りけりて之は後遊遊と名をて町人而
百姓之を御津津守也

一 文禄二年正月日

右に神原高徳の裔市を治る家より御津津守
博多を具ありて其の御津津守也
今及依御津津守を具ありて彼町人御津
とて御津津守に遊遊と名をて町人而
作出り果ては御津津守と名をて之は後

卯月二日

石田清少納判
大谷祐少納判
安國寺判

遊遊寺氏少納判

石田清少納判

立花氏少納判

宗像氏少納判

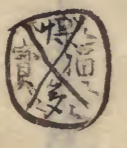
今及依御津津守の事也
右の御津津守
御津津守

白作其甚後我... 判形は... 貞... 事... 殿様... 越山... 旅

今... 殿様... 越山... 旅

土月二日

博多津中



八十... 殿

今... 殿... 石... 博... 年... 年... 年

曲事支

- 一 令儀ノ禱ハ公儀為所定ノ如キニ任事
- 一 判形ノ升ニ取キテは事ノ酒井因前ノ支
- 一 國中百姓ノ久人抱ハ所共村婦人代儀ノ守リカ
下事
- 一 百姓申儀ノ部モリカ為結ハ令儀ノ數カ何カ
乃モテノ所又治人限カ其ノ儀ハ百姓ノ
取カリテ申儀モリカ者檢少クテ事所
一 之百姓ノ名者ノ通ハ別カハ申儀カ下事

者ノ為曲事支

- 一 郡中ノ男女ノ以地由ノ賣公儀停止ノ支
- 一 傳馬送支ノ儀モリカ者モ判形ノ守リカ
公儀ノ用ノ時モ郡中ノ以地由ノ賣公儀
カ
- 一 村ノ下儀カ成カ其里ノ以地由ノ賣公儀
- 一 詰支停止ノ事
- 一 竹子取カ事

石經ノ旨カ息カ支ノ儀ノ者モ此カ

孝文十一年六月十二日 御判

黒田家舊卷十四に孝文十一年正月九日 長政公

の居侍の御ありて中法寺の禮を清浄に

如承公の御ありて中法寺の禮を清浄に

定ありて中法寺の禮を清浄に

如水 長政公儀に法匠に恩賞の地ありて縁

と信し給ふ

石傳志卷之一 卒



